普通に生きることの大切さ

勝山市立勝山中部中学校　３年　中道　美月

「ひいおじいちゃんの背中には、刀で切られた大きな傷があるんだよ。」母がそう語ったとき、私は言葉を失った。「戦争」という言葉は、教科書の中の遠い世界の話だと思っていた。けれど、その傷は意外と身近なもので私の家族の歴史に深く刻まれた現実。この一言が、私の中に眠っていた「戦争」という言葉をさらに現実のものとして引き寄せた。

ひいおじいちゃんは、戦時中に命からがら生き延びたという。けれど、背中にある大きな傷はずっとその背中に刻まれつづけた。私はその傷を実際に見たことがない。でも、母の語るひいおじいちゃんの姿から、その痛みと重みを感じることができた。

戦争は、あらゆる「普通」を一瞬で奪う。私はこの話を聞くたび日常の景色が少し違って見える。朝、目覚ましの音で起き、制服に腕を通し、友達と笑い合う休み時間。家に帰れば温かい夕飯と家族の声がまっている。それが、私にとっての「普通」だ。しかし、戦争は、爆音ひとつ、銃声ひとつで学校も家も笑い声も、何もかもが変わってしまう。今の私の日々がどれほど奇跡なのか、背中の傷が教えてくれている気がした。

私は今、平和な日本で暮らしている。学校に通い、友達と笑い合い、未来を自由に描ける。けれど、その「普通」は、誰かが守ってくれたからこそ存在していて、私は今ここにいる。

しかし、世界に目を向けると今もなお「普通」が奪われている場所がある。ウクライナでは、ロシアによる軍事侵略が続き、数十万人が命を落とし、家を失った。中東では、イスラエムとパレスチナの間で激しい衝突が繰り返され、罪のない市民が巻き込まれている。がれきの中で泣く子供や、避難する家族。その一人ひとりにも、大切な人や未来があるはずだ。戦争はそれを容赦なく奪ってしまう。

時々、何もしない日が退屈に感じることがある。でも、そんな日こそが、最も幸せな日なのかもしれない。戦争のない空、家族の笑顔、温かいご飯。それらは誰かのぎせいの上に成り立っている「普通」なのだ。

私は戦争を知らない世代だ。でも、母を通して聞くその傷の話が、私と戦争をつないでくれる。背中の傷は、時が経っても消えない過去の証であり、平和の尊さを刻む印である。母の言葉がなければ、私はそれを知ることもなく、当たり前のように日常を過ごしていたかもしれない。平和は目に見える形が存在するわけではない。だけど安全な家、何も心配せずに眠れる夜などそのすべてが平和と安全の上に成り立っている。何かが起これば、それらは簡単に失われる可能性がある。だからこそ、「普通」を守る努力は他人任せにできないのだと思う。もし再び「普通」が壊れる瞬間が訪れるなら、迷わず手を伸ばしたい。語り継ぐこと、忘れないこと、関心を持ち続けることが未来の誰かの「普通」を守り壊されないようにしたい。